

豊公謡曲

# 北条

シテ 北条氏政の靈

ワキ 五山の僧

時 秋 所 相模小田原

「是は五山の傍に住居する僧にて候。我小学の年よりも。内典外典に心をかけ候ひしを。近年撥草參玄のために西国行脚仕り候。又当年は東国へと志し候。

サシ  
「花洛を出でゝ逢坂の。山の東に鳩の海。胆吹風に荒れ残る。不破の関屋も跡に又。鳴海の浦を打ち過ぎて。三河の国の八橋や。

上歌  
「猶行末は遠江。く。駿河の富士を北に見て。伊

豆の三島を伏し拝み。足柄箱根越え暮れて。小田原近くたどりけり。く。

詞  
「急ぐ道とはいひながら。大山を越え候へば早暮れに及び候。人に宿を借るまでもなし。是なる辻堂に一夜を明さうするにて候。幽思極まらず。深巷に人なき処。愁腸絶えんとす。

カル  
「閑窓に月ある時。稀に知る夜半も悲しき松風を。絶えずや苔の下道に。聞くらん人の古へを。思ひ

やるこそあはれなれ。

シテ詞

「なふ／＼御僧は何くの人にてましませば。程近からん人家をば尋ね給はで。此草深き松陰に。露の宿りをしめ給ふぞ。

ワキ詞

「是は捨身の事なれば。樹下石上の住居こそおのづからなる座禅の床なれ。何か此身に厭ふべき。

シテ詞

「げにも捨身の御僧の。心の内こそ奇特なれ。さもおろかなる身の上に。真如実相参得の。教を示し

給へとよ。

ワキカル

「もとより心外無別法。満目青山これこそは。教の外の伝へなれ。

シテ

「いざさらば立ち寄りて。

ワキ

「猶参学を。

シテ

「極めんと。

地

「岩がねの苔の緑を片敷の。／＼。袖の白露こぼれそひ。一むら薄ほのぐと。月落ちかかる山の端に。

秋風吹きて虫の音を。誘ふは荻の上葉かな。く。

「如何に尉殿。此国は北条家年久しく守護し給ひし處と承り及びて候。北条の氏政父子果て給ひし由來を語つて御聞かせ候へ。

シテ詞  
「心得申し候。念頃に御物語申さうするにて候。  
クリ地  
「さても当家は先祖より。東の方を残らずも。従へ来つゝあたりには。恐れをなさぬ人もなく。心にまかせ居たりしに。

シテサシ  
「秀吉公は日本の。世の政あづかりて。靡かぬ草木もなかりけり。

シテ  
「氏政も此度は。都に登り礼讓を。なし申さんと定めしを。家中の者にいひなされ。又上洛を違変する。

クセ  
「然れば都には。此由聞し召されつゝ。相国大に逆鱗の。書状を下し氏政が。父子の頭を刎ん事。踵を廻らすべからずと。書きとゞめげん言の葉に。

無念を起し反逆の。色を顕はしにら山や。猶山中  
を固とし。足柄箱根の切所には。乱杭逆茂木柵を  
築き。たとひ大軍寄するとも。ゆめく叶ふべか  
らずと。思ひ定めし半天の。雲を嵐の吹く如く。  
敵の人数に襲はれて。はかなくなりし氏政が。運  
の極まる処なり。

シテ「つらく之を案ずるに。

地「昔周の代息侯は。鄭の莊公に。約を違へて戦ひし

に。息の軍は破れつゝ。息侯滅びける事は。隨ふ  
べきに随はず。力も絶えて偽の。報いとこそは聞  
えけれ。北条も其如く。正理にそむく天命は。  
後にぞ思ひ知られたる。

ロング地

「げに老人の夜もすがら。く。古事語り聞きしよ  
り。故ある人と覚えたり。其名顕はし給へかし。  
シテ「我はもとより埋木の朽ち果てたりし身なれども。  
夢にまみえて御僧の。教を頼むばかりなり。

地「身は朽ち果てゝ跡にしも。名は残りつゝ武士の。

シテ「八十氏人の氏政が。

地「幽靈なれや。

シテ「今こゝに。

地「忍ぶとすれど名取川。顯れ渡る埋木の。はかなき水のあはれ世の。面影消えて失せにけり。／＼。

ワキ歌「麻衣草の苔路の露の世に。／＼。不測不説の理りも。妙なる文字の跡見する。水鳥樹林おのづから。

声法事をやなしぬらん。／＼。

後ジテ「周孔盜跖塵の世の。迷悟善惡諸共に。如夢幻泡影

如露亦如電。応作如是觀。

詞「さて御僧の示し給ふ。禪法猶も參得の。志にて再来を。いかでか咎め給ふべき。

ワキ「さては氏政の幽靈夢幻に来れるかや。さらば過ぎこし秋の夜の。最期を顕はし見せ給へ。

シテ「お僧の仰に叛かじと。語るにつけて無念さの。数

も限りもなかりけり。既に官軍寄せくれば。彼山中の固めには。我身に変らぬ一類の。兵撰び入れ置きて。こゝを先途と待ちかけしに。

地  
「近江の国の中納言秀次の卿。此度の先陣を望み。

険難の谷峰いはず攻め登れば。味方の兵ふせぎ矢射る矢下にかかりて。堀をば飛び越えいかきはね越え。秀次真先かけ給ひ。向ふ者をば切て捨て。逃ぐるを追ひ掛け残さず亡ぼし給ひけり。相国城

に入り給ひ。如何に秀次いしくも励ます戦功かな。

此軍忠の恩恵に。世の政譲らんと。かたく契約ましませば。秀次の卿拝請し。名をも雲井に揚げ給ふ。其時相国は。勢ひに依つて破れとの。其先言に任せつゝ。今度は相国先掛にて。此小田原に攻め寄する。切つて出でんと思ひしに。同名なりし陸奥守。諫めて曰く此城を。離れて打ち出で給ふならば。雑兵の手にかかりつゝ。必ず不覚あるべし。

我介錯を申さんと。涙を流し申せしを。

シテ  
「尤と同心し。

地  
「尤と同心し。自害をせんと剣を抜き。弓手へ指し  
立て馬手へ引く。うしろより陸奥守。首打ち落し  
我も又。腹切り果てし事こそは。比類もあらぬ心  
なれ。是より相国は。関八州従へ。陸奥まで御動  
座にて。蝦夷が千島に至るまで。心のまゝに治め  
置き。還御なるこそ奇特なれ。我もお僧の教化

にて。現成脱体本分の。道に入りぬる嬉しさよ。

く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著  
『謡曲評釈第九輯』大和田建樹著